
クレヨンしんちゃん 薫風を呼ぶ 人外少年大狂劇

パタ百ハイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨンしんちゃん 薫風を呼ぶ 人外少年大狂劇

【Nコード】

N4124F

【作者名】

パタ百ハイ

【あらすじ】

昨日までは何時も通り始まり何時も通り終わっていた…今日も同じ様にそうなると思っていた…だがそれはある客の来訪により容易く崩壊した…

開幕の朝

埼玉県春日部市

野原家の朝

「こらしんのすけ！何時まで寝てるの？幼稚園バス来ちゃうわよ！」

「今日オラ幼稚園非番だから……」

「今日お仕事お休みなのはパパだけ！あんたはちゃんとあるの！」

「うーん……明日二日分行くから今日はお休み……」

「何おバカな事言ってるの！どうやって二日分幼稚園に行くのよ！」

「じゃ有給休暇使うね……確か今年はまだ一回も使っていないから……」

「幼稚園児に有給休暇があるかー！」

「労働者の権利にある筈じゃ……」

「あんた労働者じゃないでしょーが！」

「みさえ、バスが来たぞ」

「もう！」

「野原さん」

玄関のドアを開け寝巻き姿のしんのすけと鞆を抱えたみさえがバスに近寄りバスに乗せた

「おはようございますよしなが先生」

「おはようございます…」

「すみません途中で着替えさせて下さい」

「は…はい…」

「よしなが先生…何で家に来たの？」

「送迎の為です」

「今日から始めたの？忙しいね教職員って」

「毎日やってます」

「じゃ宜しくお願いします」

バスが出発しみさえは見送る

「母ちゃん」

「なーに？」

「オラがない間に実家に帰らないでね」

思いつきりこけるみさえ

擦りむいた鼻を押さえながら家の中に戻る

出迎えてくれたかのようにしんのすけの妹、ひまわりが出て来た

「ママ」

「なーに？」

「こっこ」

ひまわりを抱き上げる

こんな忙しくとも穏やかで平凡な日々が何時までも続いてくれる
とこの時思っていた

誰もがそうー思っていた

来訪者（前書き）

久しぶりです

連載の仕方が漸く解りました

取り敢えずオリキャラ二人登場です

二人共知ってる人は知っているキャラです

来訪者

「上陸したぜえ！この春日部に！」

駅からけたたましい（というか喧しい）声を言うは黒い中国服を着た少年に周囲は目を向ける

その少年を一回り小さい少女は顔を赤くして落ち着かせようとする

「やめて崎君、恥ずかしい」

「何言っただぜノちゃん、今、春日部に到着したこの喜びをこの駅にいる人達に……」

言い終える前にゼノと呼ばれた少女は崎と呼んだ少年の頭に斧を振り下ろした

「伝わるか……てか迷惑だ……」

「悪かったよ……」

斧を抜いて血みどろの顔をナプキンで拭く

「本当に？」

「本当本当」

「それなら…」

「私^{さき}崎生破^{せい}は今！この春日部市に来訪…」

傷口に番傘を突き刺した

損傷していた箇所^{箇所}に追撃を加えられたせいか、復活が遅い

少女はその少年を乱暴に引き摺って駅を去った

アクション幼稚園

しんのすけの周囲には四人の少年少女がいた

風間トオル、桜田ネネ、佐藤マサオ、そしてボーちゃん

何故ボーちゃんだけニッケネームなのかと言うとその本名が明らかになっていないから

「ねえ今日何して遊ぼうか？」

「じゃリアルおままごを…」

「絶対やだ!」

ネネが発言すると他の四人の少年は声を合わせて反対した

リアルおままごとはとても幼稚園児がやる遊びとは思えない程凝った設定と歪んだ人間関係を描く凄まじいものだからである（脚本も存在する）

「じゃ、市役所に、行かない？」

こう発言したのはボーちゃんである

「何で市役所に？」

「ボ…春日部市役所で今日…フードバトルが…ある…」

「フードバトルって？」

「簡単に言つと大食い競争だね、時間内に多く食べれるかとか…」

「平日だから旅行者くらいしか来ないだろうね」

「オラ達も参加しよう!」

「小学生からだよ参加は」

「オラ達参加資格満たしてるね」

「何処が！」

全員がつっこむ

「何で僕がフーボール参加せにやなんの？」

「旅費稼ぎ」

「兄貴から沢山貰った筈だけど」

「ええ、数千万程ね…だけど電車賃と駅弁の代金で消えたの全額が」

「…金は計画的に…」

「駅弁は殆どおのれが喰ったんですよ…」

来訪者（後書き）

まずはこのコンビ登場です
このコンビがやって来た理由とは？
ご期待出来たらお願い致します！

観光に来た男（前書き）

今回の話で新たに登場するオリキャラは…
あくまで今のところただのキャラですので…

観光に来た男

春日部市役所

「参加をしたい方は受付を済ませて控え室に入室して下さい」

「ゼノちゃん、参加しないの？」

「君がするの」

「どうしても？」

「スツカラカンになったのは誰のせいだ」

「ゼノちゃんが旅費猫ばばして株に投資したから？」

「おのれが考えなしに飯を本能のままに喰うからじゃあ！」

プラスドライバーで顔全体を何度も突き刺した

「いやぁあまり観客おりませんなあ」

しんのすけが呑気そうに言う

「当たり前だよ、平日だもん」

「でもやっぱり観客はいて欲しいぞ、他の客を殴り倒すとか発煙筒を投げつけるとか…」

「しんのすけ…それフリーガンだぞ…」

「風間君…フリーガンって…これ？」

風鈴をくわえた雁の絵を見せる

「それ…風鈴と雁…」

「じゃ魚を食べる動物園とかで見掛ける…」

「それ…ペリカン」

「アメリカの奴隷解放した大統領？」

「それ…リンカーン」

「だったら…」

どこかから持ってきた携帯で調べている

「もういい！キリがない！」

五人の後ろから、高校生程の男が現れた

「うわ！」

「あんた誰？」

「人に名前を聞く時は自分から名乗るのが礼儀ではないのか野原さんのすけ君！」

「何でオラの名前知ってるの？まさかオラのストーカー？ごめんね、オラ男に興味無いの」

「僕だつてありません思い上がりんで下さい脳内常春野郎、君は、いや君の家族は春日部市の名誉市民ではないか！知っていて当然！」

「で？」

「はい？」

「あんた誰？」

「申し遅れました私生まれも育ちも日南市、現在観光で来ておりますパタ百ハイと申します！」

「何日居るの？」

「気になるの？」

「こんなおかしい人がオラと同じ地面の上に立ちたくないから」

「何様じゃこんちくしょう」

「オラがこんちくしょうならお前は文部省だ！」

「せめて文部科学省にしてくりや！て何で文部省になるんだよ兄弟
！」

しんのすけを軽くひっぱたいた

トオルが恐る恐る口を挟む

「あの…お楽しみの最中申し訳ありませんが」

「ん？」

「モナカが申し訳無いなら雪見大福はごめんなさいか？」

「アイスの話はしてません、それより始まっちゃいますよ」

「そうだったこっつてり忘れてた」

「すっかりだろ？」

「そーともいう」

春日部防衛耐+ は会場に向かった

「?せめて (シータ) にしてくれよ！」

「誰に文句を言ってるんですか？」

トオルが遠い目でパタ百ハイを見て冷ややかに突っ込んだ

観光に来た男（後書き）

どうでした？

自分登場させました

次くらいに話進めたいと思いますので宜しくお願いします

新たな（一時的）居住者（前書き）

何か今回は展開が急ですが兎も角会えました
果たしてどうなるでしょう？

新たな（一時的）居住者

会場

参加者は10人ばかり

観客は7人のみ

「観客少ないね」

「平日だからね」

「賞品何？」

「三万円らしい」

「三万円ってどんくらい？父ちゃんの月給と同額？」

「…安月給の極致ですね…まあ勘で言っているんでしょうが…」

六人の隣に座っていた少女が口挟む

「君はなんで？」

「旅費が全てあのアホの腹の中に入ったのでお金を僅かにでも稼ご

うと思ひまして…」

「大変だね…」

「始まるわよ」

まず最初は五十枚の草加煎餅をどれだけ早く食べられるか

次に制限時間三十分以内にどれだけ多く食べられるかを競う

総合で一番優秀な参加者が賞品を贈呈

一回戦開始

「ご馳走様でした」

ゴングの鐘が鳴り終えたと同時に崎は皿を置いた

皿には屑一つ落ちていなかった

「早い…」

「何時煎餅に手をのばしたかすら解らなかった…」

「どつちって？」

「凄い…」

二回戦

三十秒経過

「終了…」

「三十分じゃないの？」

「あなたが全て食べ尽くしたからです」

呆然としている観客六人と他の参加者

何はともあれ崎は無事三万円分のチョコビを貰った

「ゼノちゃんどうする？お菓子貰っちゃったよ…」

「しゃーない、貯金下ろしてホテルの宿泊代…」

「ねえねえお兄さん」

「ん？」

「凄いね」

「ども、早食いは得意分野な方で」

「泊まる所無いならウチに泊まらない？」

「え？いいの？」

「大丈夫大丈夫、オラが事実上大黒柱だから」

「嘘つくな」

その場にいた全員が同時に突っ込んだ

野原家

台所にしんのすけ、崎、ゼノ、パタ百ハイが座っていた

「何でアンタまでいるの？」

「いや、泊まる所なくて」

「何時帰ってくるの？」

「父ちゃんは7時頃、母ちゃんは午前中から保護者との集まりに行ってるから六時半くらい」

「保護者との集まりで六時半まで？おかしくない？」

「パタ百ハイさん…ウチの母ちゃんはね、長無駄話が好きなの、だから一対一の井戸端会議でも三時間はゆうに話すの、そしてデパートでの試食も考えると…帰ってくるのはそんなくらいになるんだぞ！」

しんのすけは力強く言い切った

「にしても腹減った」

「育ち盛りだもんね」

「巢立ちには酸橘が一番だもんね」

「古い！」

フォークで喉を突き刺した

崎は自力で引き抜きアロニアルファで傷口を塗った

「よし治った」

「治ってねーよ絶対確実に！傷口接着剤でくっつけたただけだもん！絆創膏を貼ってすらないもん！」

「よっこらせ」

ゼノが椅子から立ち上がり冷蔵庫の扉に指をかけた

「何か作りますね」

「え？ゼノちゃん料理出来るの？」

「うん、しかもかなり旨いよ」

「じゃいいや、冷蔵庫気をつけてね」

扉を開いた瞬間物が落ちてきた

ゼノは開けた瞬間に左に移動していた

「どれだけ詰め込んでいたんだ？」

「リクエストあります？材料あったらそれ作りますよ、リクエストの内の一品だけです」

「じゃオラカレー」

「僕は中華丼」

「また？」

思いつきり怪訝な顔付きとなった

「不満？」

「出掛ける前日まで二ヶ月も三食中華丼のみで不満にならない奴はおらんだろ？」

「ここに」

「生物の例外は黙ってろ！兎も角却下！」

「卵料理以外なら」

「承知しました」

晩御飯はカレーとなり、野菜を刻む音が聞こえ始めた

脱線（前書き）

間空いてすみません

今回はひろしさんが少し危ない目に遭います

脱線

「ただ今、あらいい匂い」

この家の主婦、みさえがひまわりをおぶって玄関のドアを開け靴を脱いだ

ひまわりも匂いを嗅いで目が覚めたようだ

「たや？」

「ひま…カレーの匂いがしない？」

「お兄ちゃんが作っているんじゃない？」

「私より美味しそう…てあんた今喋らなかった？」

「何言ってるの？乳飲み子に言葉が…」

「言ってるじゃない」

指を口にくわえた

「ばぶ？」

「今更喋れないフリをするな！それよりしんのすけに晩御飯作って…」

台所に向かうとしんのすけが見知らぬ二人の少年と一人の少女と一緒にカレーを食べていた

「やつばゼノちゃん料理上手いな」

「今からでも家政婦として働けるんじゃないの？」

「そんなオーバーな…」

「いや、オラの母ちゃんより上だぞ」

「ただ今」

「お、みさえ！お帰り！」

「母ちゃんって呼びなさい、ところでその人達は？」

「よくぞ訊いてくれました！私パタ百ハイ…」

「何か五月蠅い」

ひまわりが辛辣なようでの的確なコメントを放った

「shockを受けたぜ…同級生達だけでなく乳飲み子からも同じコメントが来るとは…」

「乳飲み子が喋ったという驚愕な事実はスルーですか？」

「そう思うなゼノちゃん、世の中既存の常識では計り知れない事がいっぱいあるんだから！」

「そりゃそうだけどさ…私達が春日部に来た理由と関係しているんじゃない…」

「春日部に来た理由？あなた達何の目的で…」

「すみませんが今は話すつもりはありません」

「僕の目的は…」

「黙っててくれませんか？あなたが会話に参加すると話がややこしくなる…」

「それでね母ちゃん、この人達を暫く家に泊めてやっていい？」

「お願いします、私達にはお金が無いんです」

「でも…」

「私も崎君も一通りの家事は出来ます」

「だけどパパが何て言うか…」

「お願いします。美人で優しくおしとやかなお姉さん」

「説得してみるわ」

（早っ！）

全員がそう思った

「でも…」

「何ひまわりちゃん」

「え？お兄ちゃんあたちの名前教えた？」

「うっん」

「ゼノちゃんは大抵の人間は初見だけで名前だけは分かるんだよ」

「凄いね」

「よくあんなお世辞つけれるね」

「お世辞に弱いタイプの人と思ってね」

「ところで旦那さんは？」

「家に近づく前に乗り遅れたから一つ後の電車に乗って帰るってメー
ールが届いたけど…」

満員電車に乗っているひろし

彼の表情は少しだけ嬉しそうだった

理由は久しぶりに十日間の纏まった休暇が入ったからだ

そしてその休暇は明日からである

「いやあ…明日から楽しみだなあ…何しよっかな…ピクニック行こ
うかな…」

そんなひろしが乗っている最後尾の車両を妙な円盤に乗っていた男
が眺めていた

全体的に突っ立っている藍色の長髪とは対照に、目元の髪は下ろし
ている

服装はユウガオの刺繍が入った灰色のYシャツに赤いジーンズ

そんな男が指を鳴らすと空から何本かのレーザーが照射され

そのレーザーは連結を外し車輪を二つに切断

車両は当然脱線した

幸い周囲は何も植えられていない畑で人はいない

そして最後尾の為被害は少ない事…

脱線した最後尾の車両からは我先にと大なり小なり怪我をした人達が出始めた

「おい出て来る出て来る…さて…遊びで来たから早めに帰らないといけないんだけど目撃者出すのも駄目なんだよなあ」

言葉とは裏腹に全く嬉しそうに呟いた

脱線（後書き）

ひまわりが何故か喋れるようになった

そして謎の男の襲撃：

ひろしさんは無事に帰れるのでしょうか？

祖父登場（前書き）

大晦日になってまた更新しました

祖父登場

「ただ今」

「おう父ちゃんおかエリマキトカゲ」

「パパお帰りんごは冬の果物」

「しんのすけ、ひま、ただ今…てあれ？ひまわり、お前今喋らなかつたか？」

「気のせい気のせい」

「思いつ切り喋ってんじゃねえか！」

「遅かったわね…どうしたの？」

「いや…電車が脱線を起こして軽傷で済んだ人達が変な乗り物に乗った男に襲い掛かって…」

ひろしの言葉に崎とゼノは反応する

「その男はどうなりましたか？」

「ここから先は覚えていない…何時の間にか家の前にいたんだ…」

「夢でも見たんじゃないの？」

「夢じゃねーよ！」

「巻き込まれたのなら…隠す必要は何もありませんね…」

「君達は？」

「オラの新しい友達、この子がゼノちゃん、こっちは崎生破さん、んでこっちは…」

「よくぞ聞いてくれました！自分パタ百ハイ、ここに来た目的は…」

「無視していいぞ」

「そうする」

「何てこつたあ！肩が凝ったあ！」

「アイツがどんな奴なのか知っているのか？」

「説明の前に言っておきます。今から言う事は他の人に言わないで下さい、そして…普通ではとても信じられない内容ですので…それを頭に入れた上で聞いて下さい」

「分かった」

「分かったわ」

「分かったぞ」

「うん」

「承知しました」

脱線した車両に腰掛けているのは男

コートを羽織り、白髪で目元が髪で隠れている

周囲には死んでいる男

襲った謎の男も顔面がグチャグチャになって原型を留めていない

間違い無く死んでいる

コートを羽織った男はバイブ音の鳴った携帯電話を取り出す

「もしもし…君か、ああ始末しといた」

『悪いな』

「気にするな…そのくらいは別にいい…仕事だし…これからも次々と生破の味方の道士が来る…それまで生破がカバー出来ない分をする…」

『君も自分の弟子の世話とか仕事多いのに大変だね…』

「じゃあ君がしろ」

『却下』

「あつそ…」

『僕は蓬莱山とは縁を切っているしね』

「じゃあな…さて…後処理は警察で充分だし…一旦帰ろ」

「嘘でしょ？」

「本当です!」

「大人をからかうのもいい加減にしてよ、そんなの有り得る訳ないじゃない!」

「で…俺達はどうしたらいい？」

「あなたそんな荒唐無稽な話信じるの？」

「実際襲われたんだ…信じるしか無いだろう」

「オラも信じるぞ！」

「有難うございます…何時も通り生活して下さい。奴等は余程の事がない限りは一般人に手は出さない…今回のようなケースは稀です」

「分かった…」

電話が鳴った

「誰だよこんな時に…もしもし」

『おうひろしか』

「親父…」

電話をかけてきたのはひろしの実父にしてしんのすけの祖父、野原銀之介だった

「何の用だよ」

『畑仕事も大分終えたしたまにはお前達の顔も見たいしの、今から遊びに来るよ』

「いいけど…」

「ほんじゃ 今晚は」

玄関のドアを開け、銀之介が現れた

しんのすけが銀之介に抱き付く

「じいちゃん」

「しんのすけー」

「会いたかったあ」

「止めんか気色悪い！」

「おじいちゃんこんばんは」

「ひまわりちゃんも元気そうじゃな、相変わらずめんこいのう」

「乳飲み子が喋ったのスルー？」

幼稚園へ…途中に（前書き）

三週間以上開けて久しぶりの更新です
出来たらお楽しみを

幼稚園へ…途中で

翌朝

といっても時間的にかなり早い

朝日が昇り始め、僅かに明るいだけだ

何時も通りみさえはしんのすけを起こす

しんのすけは銀之介と抱き合って寝ていた

「恋人同士か…」

「仲良しですね」

「仲がいいのは結構なんだけどね、しんのすけやひまわりに悪影響を与えないで欲しいのよね…」

話し掛けてきたゼノの言った事に溜息混じりに小言をいう

しんのすけは銀之介の事が大好きだし、銀之介もしんのすけを可愛がっている

だが銀之介はしんのすけに輪をかけたような性格の持ち主で、家に来る時は主に自分が迷惑を被っている

幼稚園に行った時は苦情を貰った事もある

みさえもそんな銀之介が嫌いではないが自重して欲しいという思いはあった

「何でゼノちゃんが起きてるの？」

「いえ、崎君ちでは主に家事をしてましたから早い時間帯に起きるのがクセになってて…」

現在崎家には崎とその兄、ゼノの三人が暮らしている

お兄さんは家事全般上手だが相当の学者バカで研究や論文制作になると終えるまで何日も閉じこもるらしい

崎の方も家事全般は人並み程度には出来るがあまりしない

自分が散らかしたゴミをゴミ箱に分別して捨てる程度だ

なので必然的にゼノが崎家の家事を普段やっている

「ほへー…何歳からやってるの家事…」

「崎家に居候を始めたのは三歳の中盤頃からだったから…その時からです、最初は失敗を繰り返してましたが」

「凄…」

取り敢えず野原家在住者を全て起こし朝飯となった

しんのすけもひろしも余裕を持って幼稚園や会社に行く準備が出来た

バスが来る時間帯

幼稚園バスが停まった

「お早うございます」

「お早うございますよしなが先生」

「よっよしなが先生」

「珍しいですね、しんちゃんが時間に間に合うなんて…」

「まね、じゃ、出発お新香！母ちゃん行つてらっしゃい」

「行つてきますでしょ？」

しんのすけの後に、銀之介、崎、パタ百ハイも乗り込んだ

バスのドアは閉じ、発進した

「珍しいなしんのすけ」

「何があつたの？」

「それはそれは、私パタ百ハイの…」

「あんたに…聞いてない…」

ボーちゃんはパタ百ハイを一蹴する

「みんな失礼だな…オラだつてたまには早起きするぞ」

「しんちゃん、幼稚園バッグは？」

「忘れちゃったみたいだね」

「何で崎さんも乗ってるんですか？」

「ここにバスがあるからさ」

「よし、幼稚園につくまでカラオケ大会始めるべ！」

「ほっほーい！」

その時、幼稚園バスの前でフードを被った男が飛び出した

野原家のガラス窓の隙間から小さい影が飛び出した

足をボトルキャップで固定されている為飛び跳ねるしか移動出来ない

地面に着地した時、シロとゼノに見下ろされた

「しまった！見つかったかったキヤル」

「君…何者？」

幼稚園へ…途中に（後書き）

シロとゼノが出会った人物は…？

バレてますよね（笑）

では続きを宜しければ楽しみにして下さい

防護スーツを纏った男（前書き）

2ヶ月以上放置してすみませんでした

防護スーツを纏った男

「あなた…人間？」

「に見えますキヤル？」

「見えません、尋ねただけです。あなたがしんのすけ君達と一緒に食玩に夢中になりフィギュア化した親達を助ける為、食玩のオマケの蔑ろにされていたお菓子の怨みを晴らす為にしんのすけ君に“変身お菓子”を与えた事やその後普通のフィギュアに戻ったけど異変により活動再開した事は解りました」

「え？私説明した？」

「してませんしされてません、私少しでも理解が早いんです、同年代よりちよつとだけね…」

「少しじゃないよ、思いつ切り超越してるよ」

シロが溜息をつきながら台詞を吐いた

幼稚園バスの前に現れたフードの男は

バスに轢かれた（当然）

フードが捲れ、顔が露出した

その顔は崎の顔だった

いや、酷似してはいるがよく見たら少し違うし雰囲気が違う

崎は呆れながらバスを降り、春日部防衛隊もついて行くように降りた

「痛たたたた…」

「何してんの？兄貴」

「この人お兄さん？」

「うん…でもそれを尋ねる前に…」

顔を乱暴に掴み、皮を剥いだ

機械の中身だった

もう一度剥ぐと、先程と同じ顔

更にもう一度剥ぐ

顔の皮を剥ぐ動作を繰り返すと、頭部その物が無くなった

その時、崎の兄の腹部が割れ、中から汚れた白衣を着た崎の兄が顔を見せ、脱ぎ捨てた

「もう一度訊くけどさ…アンタ何してんの？」

「新開発した防護スーツの実験…顔はお遊びで少し手を加えてみた」

「実験結果は？」

「失敗…バスに轢かれた時の痛みやダメージは全然無いけど転んだ時突き指しちゃってさ…」

「材料何？」

「ご飯、鶏肉、卵、三つ葉…味醂、醤油…そして…」

「親子丼の…材料…だよね？」

「そんなもんでどうやってこんなスーツ造れるのよ！」

「すみません…崎さんの…お兄さん…」

「爆仙^{はくせん}、崎爆仙16歳、専攻は工学、宝貝開発及び研究を主にやっております」

「ほうほう、こつがくって事は爆仙さんは契約金は高いのか」

「いや、その高額違つ」

「で…兄貴は何しに来たの？防護スーツの実験なら兄貴の研究室で十分出来るよね？」

「君と同じ理由…正確には…君の手助け…」

「戦闘能力ゼロのアンタが手助け？」

「キツいな…戦闘には参加しない…僕の友人がやってくれる…」

「それでは出発しますよ、宜しければ爆仙さんも一緒に宜しいですよ？」

「はいそれでは遠慮無く…」

「遠慮しないのね…」

「その友人さん達はどんな人？美人のおねいさんいる？」

実にしんのすけらしい質問だ

その質問に爆仙は親切に応える

「いるよ、歳の割に胸は小さいけど活発で可愛い人と不愛想で無口だけど綺麗な人が」

「じゃ幼稚園にレッツラゴー！」

バスに乗り込み、新たに一人加わりアクション幼稚園に出発した

子供は遊びが学びです（前書き）

超久しぶりに更新します

子供は遊びが学びです

勝手について来た面々の内で園児達と初対面の崎とパタ百ハイと爆仙は園児達とすぐに仲良くなった

崎はあつという間に園児達に懐かれ、引っ張りだこであった

爆仙は部屋で数人の園児達に持ってきた玩具で遊びを教授していた
お手玉を教えた後、凧の作り方を教えている

「すごい、爆仙お兄ちゃん器用だね」

「嫌々こんなの誰でも出来るって、そうだ、凧を飛ばす時は電線に注意してね」

「はい」

銀之介は腹に顔を描き

「みんな前回見損ねたわしのお髭見たーい？」

「見たい見たーい」

囲っている園児達が声を揃えて言った

「止めて下さい！」

慌ててよしなが先生がストップをかける

因みにパタ百ハイは…

「あー…いいお茶だ」

職員室に勝手に入り込み、留守をいい事にお茶を淹れ、茶菓子を食べて和んでいた

彼等の周りに春日部防衛隊はいない

何故なら彼等はリアルおままごとを強制的にやらされていた

内容は……文章で表現するには作者では力不足の為、想像にお任せする

それらの様子をどのグループにも混じらず遠巻きに見ている園児がいた

短いポニーテールの黒髪に団子眼をした少女

彼女はしんのすけ達と同じひまわり組に所属している

名は辻野希つじののぞみ

今年の夏からの転入生で、他の園児達とあまり仲良くしようとせず、一人でいる事が多い

因みに両親は共働きで忙しいのか、参観日等に来た事は無い

何故か送迎バスではなく、保護者の送り迎えで通園していた

その保護者が教員や園児、保護者の前に姿を現した事は一度もない

「おい希ちゃん」

「野原君、何？」

希にしんのすけは声をかけた

「リアルおままごとの役交代して」

「役は？」

「会社が潰れて妻子に逃げられ親戚宅に居候している今年五十の中年、大好物は鰹の塩辛」

「やだ、最後の設定の意味が分からない」

当然だ

「御願います」

土下座をした

「靴も嘗めるから」

「止めて靴が汚れる」

「ちょっとしんちゃん、私とおままごとがそんなに嫌なの？」

「うん」

「分かった、但し条件がある、それを呑んでくれたら代役を務める」

「何？」

目を輝かせ彼女に顔を近付ける

「教えてくれない？」

「オラの身体の黒子の数を？」

「そんなの知りたくない」

「母ちゃんの体脂肪率？」

「知って何か自分に得するの？」

「オラとななこおねいさんとの関係？いやー困るな希ちゃんは、オラとななこおねいさんは……」

興奮して言っている事がよく分からない

希は取り敢えずしんのすけにキャメルクラッチをかます事にした

「ギブギブ！」

「真面目に聞いて、聞かないと関節全部外すからね」

「ほい……」

しんのすけの拘束を外す

「で何？」

「うん……」

休み時間終了の予鈴が鳴った

急いで園児達は教室に入る

ひまわり組の教室に入る際に希はしんのすけにこう呟いた

「明日君の家族や春日部防衛隊がした冒険の話聞かせてくれない？
戦国時代でもパラルワールドでも何でもいいよ」

呟いた時の顔は、普段の彼女からは想像がつかないくらい輝いた笑顔だった

謎の勢力（前書き）

今回は少し長めです

謎の勢力

「何の事言っているの？」

「冗談がキツいなあ、君達家族と君の友達はかなり有名人だよ？他にもプリプリ王国で願い事で魔人に小宮悦子のサインを頼んだのも知ってるよ？ヘンダーランドでランプを使ってオカマ魔女とババ抜きをしたのも知ってるよ？臨海副都心で魔人の封印を解いたのも知ってるよ？更に……封印場所に行く時つばき……だっけ？その人にプロポーズ同然の告白したんだよね？やるねー」

「何で……」

「プリリンに騙されてマタって娘を封印してしまったって……駄目じゃない、敵の言う事鵜呑みにして仲間を悪者として見るなんてさ、まあ和解できて何よりだけどさ」

「こらそこっ今はお勉強の時間です！お喋りは休み時間にしなさい！」

「ほーい」

「また後でね、今度はあの愉快なお兄さん達の事も聞きたいな」

放課後

今日は短縮で午前で終わりの為園児達は帰りの会が終えるとすぐに送迎バスに乗り込む

希はその後もしんのすけに話し掛けようとするが、しんのすけが休み時間は春日部防衛隊や他の友人と積極的に話し掛ける事で話し掛けられる隙を作らなかったので出来なかった

その希は何時も通り送迎バスに乗らず、個別で帰宅している

野原家

「ただい魔女狩り」

「お帰リンカーンは奴隷解放をした大統領」

「しんちゃんお帰りキャルル」

「ただ今川焼きは白餡が……のわわぁ！」

みさえの肩にしがみついているボトルキャップの猫耳のフィギュア

に、しんのすけは目を丸くする

「こうして会話するのは久し振りねしんちゃん」

「お……おう……でも何でキヤルトちゃんがまた活動しているの？」

「それはゼノちゃんが簡単に話してくれたよ……同時に……ゼノちゃん達が来た理由はひまわりちゃんが喋れたりキヤルトちゃんがまた動けたりしたのと同じ理由だよ」

十歳前後の白い天然パーマをした少年がキッチンから出て来た

「あんた誰？」

「シロだよ、しんちゃんが拾ってきたしんちゃんの友達の」

「嘘？」

信じられないのは無理は無いだろう

今までシロは何度か言葉を発した事があるが、人間の姿になった事は無い

確かに声はシロだったが、そんなの証拠にならない

だがそれはシロも予想していた

いきなりそう言われたら、自分がしんのすけの立場でも信じなかったらう

「だよな……じゃあこれなら信じてくれる？」

シロは元の犬の姿に戻った

「おーシロー！ごめんね友達を疑ったりして」

「いいよ、こうして信じてくれたんだし」

「で、しんのすけ、生破君達は何処？」

「え？」

しんのすけは記憶を探ってみる

帰りの会は……いた

送迎バスにも一緒に乗ってみんなで大いにハシャいだ

バスが家に着いて降りたのは……自分一人だけであった

「みんなバスの中だ……」

「え？困るよ、僕達がこうなった理由をちゃんと訊きたいのに……」

「ゼノちゃんは？」

「ひまわりの面倒を見ていてご本を読んであげていたら一緒に寝て……」

最も日頃の疲れもあり、先に寝たのはゼノであった

一方、送迎バスでは

「では三番！『白い冬』を歌います！」

「いいぞいいぞ！」

「……いい加減降りて下さい……」

バスの中は最早宴会場と化していた

よしなが先生が疲れた表情で崎達に注意する

場所は変わり、春日部に最近オープンした漫画喫茶

その店長室に繋がる地下の四十畳程はある広い部屋

部屋の中央に安置されているソファーに辻野希が座ってティーポットの紅茶をティーカップに淹れ、啜っていた

テーブルとソファーの周りには十数人の男女がおり、向かい合う形で安置されているソファーには中学生程の少年が足を組み、テーブルの上に重ねてある『こち亀』を読みながら後ろに立たせているメイド姿の幼女に番茶をワイングラスに注がせて飲んでいる

少年の横には小さな人影がちょこんと座っている

「つまりだ辻野、お前は崎生破が野原しのすけの家に住んでいる……そう言いたいんだな？」

「はい、と言ってもこれは彼等から直接聞いたのではなく、春日部防衛隊の面々から聞き出した情報に過ぎませんが……」

「それでもいいよ、そもそも崎生破がお前に入らせた幼稚園の関係者に接触したという事自体嬉しい誤算なんだからさ」

「野原しのすけに関する噂の詳細を聞き出す事は出来ませんでした……それどころか失態を犯してしまい、警戒され、聞き出すのは容易では無くなり……」

「あー構わないよ」

「如何為さるのでしょうか？」

傍らにいた執事服を着た青年が尋ねる

「春日部防衛隊と野原一家を纏めてここに連れてこい、なるだけ無傷でだが抵抗したら腕っ節も使つていい、但し気絶までだ、それと事はデカくするな、可能な限り穏便に事を済ませろ」

「ねーねー」

小さな人影は少年の袖をくいくいと可愛らしい力で何度か引つ張った

「何だ？」

「いいの？あんな指示出して」

「いいのいいの、コイツ等は破天荒だが節度は弁えているし俺の命令には比較的忠実だしな」

「破天荒……ね……君が言うかよ」

「それもそうだな、元々勢力拡大の為に異変を利用しようとして春日部に来たが……投げつける一石で鳥が五羽も六羽も採れそうだ…

…」

「何時実行致しましょうか？日にちを決めて計画を立てなければなりません、行き当たりばったりでは失敗するだけでなく足が着く可能性も跳ね上がります……」

「あー……そうだな、避けたいが実力行使する可能性も入れとかんと……まあ辻野、お前に全部任せる、絶対連れてこい」

「承知いたしました、魚塚士朗様」

夜の話（前書き）

超久々です

なので今までの話と今回の話にズレがあったとしても…
許してくれたらなーなんて……

夜の話

「春日部が何等かの災厄に巻き込まれる？」

「うん、そう」

帰宅した崎に春日部に訪れた理由を尋ねるしんのすけ、みさえ、ひろし、シロ（人間態）、キャルト

この場にはいないひまわりとゼノ、パタ百ハイ、銀之介は布団の中で眠っている

爆仙は無関係者を巻き込みたくないの一点張りであったが、しんのすけの

『家族や友達がそれに巻き込まれた時点でオラは充分関係なくなんか無いゾ!』

の一言でみさえとひろしも詰問し、他言無用という約束の元、説明する事にした

「まず……何処から答えていくべきか……」

「はい」

みさえが拳手する

「何ですか？」

「異変が起きるって言うけど……何が起こるの？」

「知りませんよんなもん」

あっけらかんと答える爆仙

「ちょっとふざけてるの！」

「落ち着いて下さいよ、僕達に伝えられた事はあくまで異変の事前防止、出来なければ拡大の防止、それでもってその異変を起こしている原因を突き止める事、何が起るかなんて本当に知らないんですよ」

「待ってくれ、異変を起こしているって事は何か超自然的な何かが関わっているのか？」

ひろしが慌てたように訊ねる。彼等親子は常識では考えられないような事件にしょっちゅう巻き込まれているのもあって、その手の理解は早かった

「はい、関わってますよ。それが何かは知りませんけど」

「待ってよ爆仙さん、知らない知らないってばっかで応えに……」

「知らないから知らないと答えた。僕は知ったかぶりはしない、特にこんな話を話す上では……信じる信じないは別ですがね……」

『どう思う?』

『多分、全部本当だと思う』

小声で話すみさえとひろし

次にしんのすけが手を挙げる

「はい何ですか?」

「さっきから知らない知らないって……それなら他の人に話しても……」

「信じてくれると思う?」

しんのすけは考え込む

近々何かが起こり、それが良くない事と分かっている、何の根拠もなく、どんな事が起こるか分からないのにそれを言い触らしたら

どうなるか

答えは簡単だ、信じる信じない以前に相手にされない

人を信じさせようと思うのなら、理論的な説明やそれが起こるという確固たる証拠、または前例が必要だ。判明していない事尽くしの今の状況でどう他人に理解、納得をさせようというのだ

「だろ？だから誰にも知られず秘密裏に解決する必要があるんだよ」

他に質問は？と訊く。誰一人手を挙げない

夜も遅いので、早々と寝る事にした

因みに崎生破は話が始まる前に既に目を開けながら眠っていた

その夜、風間家、桜田家、佐藤家の子供達が何者かに殺われた事を野原一家が知る事となるのは、夜が明けてからだった

夜の話（後書き）

何か妙な展開になってきたようになってないような…

ゼノ「かなり物騒な展開なのは確かね」

何時も通りでない土曜の朝（前書き）

こっちは約一ヶ月ぶりです……

何時も通りでない土曜の朝

朝日が差し込んできた……そのお陰で、少しだけ目が覚めた……そろそろ幼稚園バスが来る時間かな？

早く起きないとまた遅刻しちゃう

だけど眠いし、まあいいや

と話を終わらせ、再度熟睡する

「おいしんのすけ！」

ひろしが、今までにない表情で駆け込んできた

「うるさいな、どうしたの父ちゃん、仕事行かなくていいの？」

「今日は土曜日だ！それより来い！大変だ！」

ひろしはしんのすけを無理矢理布団から引つ張り出すと、大急ぎでテレビのある部屋まで駆け込んだ。既に部屋には全員がいた

「もう……何なの？せつかくの土曜日なのにみんなしてテレビにかじりついて……」

「見れば分かるわよ！」

「おわっ！」

みさえは自分の前にしんのすけを座らせる

しんのすけは、ニュースで流れている内容を聞いて、一気に目が覚めた。理由が分かったからだ

しんのすけの友人である風間トオル、桜田ネネ、佐藤マサオが全員ほぼ同じ時間帯に『誘拐』されたというのだ

そして、誘拐の『目的』もその『手段』も謎のままと

まず、佐藤家の場合、『どうもなっていない』のだという

家の中にいるのを攫ったのは判明しているが、鍵を無理矢理こじ開けたりした跡が無いらしい

次に、桜田家の場合、玄関の鍵は開けられてはいたが、『自然過ぎる』らしい。まるで、合鍵で開けたかのように

風間家の場合が、一番謎だった。何故なら、風間家のある部屋の玄

関のドアのある壁が、『粉々に破壊されている』からだ

人間の力でこんな事が出来る訳が無い、爆薬の類の跡も見付からない

警察はこの三件の誘拐を同一のグループの犯行と見て捜査をしているという

崎はテレビを切った。その表情は、野原一家の知っている温和で人懐っこく、能天気な笑顔ではない。真剣そのものだ

「風間君達を……」

何処か重い空気のまま、崎はその表情を崩さず、喋り出した

「風間君達を攫ったのは、十中八九『能力者』の集団の仕業だ」

「『能力者』の……」

「集団？」

「たややい？」

「何でそんなのが……」

「春日部に今起こっている異変とは一体何なのか……それは分からない。だけど、それを狙って春日部に来ている能力者もいるみたい

なんだ……ごめん、それを言うべきだった」

自分を責めている感じで喋る崎に、ひろしが肩に手を置いた

「気にするな、君達は何もしていない」

「そうよ。悪いのは誘拐した奴等よ」

「それで落ち込むより、それでどうしたらいいのかを考えた方がええ」

「おおっじいちゃん言いますな」

崎もゼノも爆仙も、野原一家と野原家の住人達の優しさと温かさに、少しだけ気が楽になった

「ご苦労、よく野原しんのすけの親友三人を攫ってきてくれた」

「それで……お次は如何致しましょう？」

執事服を着た穏和そうな青年が、自分達の主である緑髪のマントを羽織った少年に訊く

「三人が無事って証拠に写真撮って手紙を同封して送っとけ」

「しかし陛下、それでは警察も来るのでは無いのでしょうか……」

メイド服を着た少女が、ワイングラスにファンタグレイプを注ぎながら言う

その当然と言える不安を、少年――魚塚士朗は鼻で笑う

「その心配はハナから不要だぜリシアンシス……辻野が言ってただろ？『崎生破が野原家に泊まってる』って、警察呼んでも振り返り打ちになるって分かっている奴がいるって事だ」

「ハア……」

「まあその意味でも『能力者の仕業と敢えて分かるような手段で攫う事』を考案した辻野には改めて誉めてやらないとな」

「それで、風間トオル、桜田ネネ、佐藤マサオのお三方は……」

「此方の事情に一方的に巻き込んだんだ。解放以外で可能な事なら

出来るだけその御要望を叶えてやれ」

「承知致しました」

「他は今ここにいない奴等と呼んどけ……明日にでも来るかも知れないからな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4124f/>

クレヨンしんちゃん 薫風を呼ぶ 人外少年大狂劇

2010年10月8日23時54分発行